



上顎犬歯萌出異常に起因する切歯歯根吸収の早期診断法の臨床応用について

Clinical application of early diagnosis of maxillary incisor root resorption due to ectopic canine eruption

○稲毛 滋自、今井 徹、安野松王、鮎瀬節子、高橋滋樹、竹内 誠、切通正智、久木宏顕、野村 聡、三村 博、浅井保彦

日本臨床矯正歯科医会 学術委員会

○Shigeyori Inage, Tohru Imai, Matsuo Yasuno, Setsuko Aigase, Shigeki Takahashi, Makoto Takeuchi, Masanori Kiridoshi, Hiroaki Hisaki, Satoshi Nomura, Hiroshi Mimura, Yasuhiko Asai

厚生労働省が実施した平成 17 年度と平成 23 年度の歯科疾患実態調査を比較すると 12 歳以上 20 歳未満で叢生のある者は約 40%から約 44%へと増加傾向を示している。また、時間軸をパラメーターとした研究結果によれば、若い世代ほど顎骨は狭小化し歯冠幅径の増大による叢生症例の増加が報告されている。これらの報告から、上顎犬歯の萌出異常に因って切歯の歯根が吸収される症例の増加が予想される。上顎犬歯による切歯歯根吸収の発現頻度は低いとは言え、歯根吸収が起こってしまった症例に対する矯正歯科治療の難度は高く、患者の負担は大きくなる。

第 38 回日本臨床矯正歯科医会札幌大会において神奈川支部学術委員会（以下、神奈川学術と略す）は、「上顎犬歯萌出異常に起因する前歯歯根吸収のリスクを早期に予見する試み(その 1)― パノラマ X 線写真を用いた数値解析 ―」と題して、考案した角度計測と 2 種類の距離計測による数値解析によって、上顎犬歯による切歯歯根吸収を早期に発見できる可能性について報告した。第 40 回記念日本臨床矯正歯科医会東京大会において本部学術委員会（以下、学術と略す）では、上顎犬歯による切歯歯根吸収が片側性に認められた 103 症例のパノラマ X 線写真（以下、パノラマと略す）について、神奈川学術が考案した方法に従って解析した結果、角度計測の評価値が 1 以上、2 種の距離計測の評価値が 1 未満を同時に満たす症例、すなわち健側犬歯に比べて患側犬歯がより近心傾斜し、その先頭がより近心かつより低位に位置する症例は 90 例 87.4%と高い頻度を示したことより、神奈川学術が考案した解析法の有効性が実証されたことを報告した。

また、学術の研究によれば、評価値の 3 条件を同時に満たす患側犬歯は、8 歳かつ歯牙年齢 IIIA でわずかに 1 例であったものが、10 歳または III B の時期になると急激に増加することが判明した。この結果から、歴年齢では 8 歳までに、歯牙年齢では IIIA の時期にかかりつけ歯科医や矯正歯科医による触診とパノラマの撮影によって、上顎犬歯による切歯歯根吸収のリスクについてスクリーニングを受けるが強く示唆された。スクリーニングの結果ハイリスクと診断された場合について、症例を供覧しながら対処法を提案する。

学術の研究に用いた 110 症例中約 4.5%に相当する 5 症例は、矯正歯科治療中に上顎犬歯による切歯歯根吸収が認められた症例であった。そこで、本研究の臨床応用という視点から、矯正歯科治療中の上顎犬歯による切歯歯根吸収を回避するための検討をおこなったので臨床例を交えて報告する。

本研究に一人でも多くの会員がご参加いただき、その結果を会員の共有財産として活用することによって上顎犬歯による切歯歯根吸収を未然に防ぐことができれば、患者の負担は軽減される。さらにその成果を広く歯科医療分野全体に普及できれば、公益法人としての我々の使命を果たすことにもなると考える。

症例を提供くださった会員（敬称略）

朝井寛之、五十嵐一吉、池森由幸、井上裕子、宇治正光、大塚裕純、木下三樹夫、島田 正、菅沼與明、土屋朋未、富永雪穂、延島ひろみ、野村泰世、平賀順子、福増一浩、前田忠利、前田真琴、山形圭一郎、渡辺八十夫